六甲の山並みから見た日本と世界〜神戸大学での学びと日本文化

Damian Flanagan

皆さん、こんにちは。本日は母校の神戸大学で、このようにお話しする機会を頂きまして、大変うれしく思っております。

大学時代のことを振り返って話す、と言うと、お世話になった先生方について、またそこで何を学んだかについて話すのが通例だと思います。ですが今日はちょっと違ったアプローチをさせて頂き、なぜ神戸大学が日本のみならず、世界でもユニークな位置を占めているのか、そして、神戸大学での経験によって、私の人生に対する態度がどのように変わったのかをお話ししたいと思います。話のクライマックスは後ほどのお楽しみとしまして、まずは、最初は神大に全く関心がなかった私が、どのように深い愛校心を抱くようになったのか、ということをお話ししましょう。

元々私は神大については何も知らず、神戸にも神大にも来るつもりはありませんでした。1992 年、私が 23 歳の頃、日本文学を学ぶ大学院生への文部省からの奨学金を申請した当時、どこで勉強したいかは心に決めていました。それはここではありませんでした。比叡山と東山を望み、哲学の道の隣にして銀閣寺にほど近く、日本文化の源である古都にある、京都大学で勉強したかったのです。私が当時付き合っていた女性が京都大学にいたこともあって、そのグループの一員となりたいと感じていました。

ですから、日本文化の粋である古都京都でなく、全く西洋化された近代都市神戸に行くと決まった時、どんなにガッカリしたか皆さん想像がつくでしょう。どうやら、私が学びたかった「明治時代の日本文学」の先生が当時の京大にはいなかった、という理由で、神大に行く事に決められたようでした。

さらに落ち込むことに、私が住むことになったのは、ポートアイランドにある留学生向けの学生寮で、新しいマンションがたくさん建っているところでした。日本文化にどっぷりつかり、日本と深く関わりたいと思ってやって来たのに、

歴史も文化もない人工の島に、外国人ばかりと一緒に住むことになったのです。まるで江戸時代に長崎の出島に集められ、日本本土に足を踏み入れることの出来なかったオランダ商人になったような気がしました。

きつい坂を登り大学へと向かってみると、私はまたまたショックを受けました。ここは日本でも有数の良い学校だと聞いていたのに、建物が古くて崩れそうだったからです。私は日本の大学の抱えるパラドックスに早くも気付き始めました。つまり、良い大学であればあるほど、施設がボロボロである、ということです。逆に言うと、もしこれが本当ならば、神大が日本で有数のいい大学であることは間違いありません。床は全部石がむき出しで、じゅうたんは無く、窓ガラスは薄く、冬の暖房は小さなガスストーブだけのようでした。机も椅子も本棚も電灯も、みんな質素なものばかり。行き過ぎた質実剛健という感じでしょうか。

担当教授の林原先生の部屋は、完璧に本に占領し尽くされていました。ドアを開けると真正面に本棚があって、それに沿ってカニ歩きをしないと部屋に入れないのです。やっと入るとそこら中に本が積んであって、真ん中にやっと座るだけのスペースがありました。そこに鎮座していた林原先生その人は、薄いヒゲがあり、ヒモ付きのメガネを掛けた、40 代後半の優しいヘビースモーカーでした。

こうして林原教授の下で勉強するために神戸大学に送られたのですが、教授は私が研究したいと思っていた明治の文豪、夏目漱石には特に興味があるわけではなく、代わりに何を研究したら教授が納得してくれるのか、はかりかねていました。先生はその頃、当時の私には全く解しがたいテーマで講義をしていました。例えば、明治初期の政治小説などで、それは印刷版さえ存在せず、手書きのものを解読しなくてはならないのですが、私は全く読めないわけです。林原先生はそれまで誰も研究したことがないものを研究しているようでした。

その内、文学部の他の 2 人の有名教授の授業も聴きに行くようになりました。ひとりは平安文学の藤原教授で、まだ若く、フワフワした髪型の先生でした。今となっては、藤原教授は源氏物語に於ける愛の概念について長論文を書きた

かったのではないか、と思えるのですが、、、果たしてそれを実現されたかどうかは分かりませんが、、、、先生の講義はとんでもない方向に発展することが多く、突然講義中にシューベルトの歌曲をドイツ語で歌い出したこともありました。

しかし、何と言っても花形は野口武彦先生でした。野口教授は文字通り平安時代から現代までの文学について何十冊もの著書があり、「天才に近い」と言われていた学者で、正にそのような待遇を受けていたと思います。髪をおだんごにしばり、長い指を持ち、スラッとした体つきの野口先生は、ちょっと、奔放な禅僧、と言ったような雰囲気があって、昔はお酒に強かった、ということでも有名でした。でも私が神大に入った頃には肝臓を悪くしたらしく、武勇伝は昔話として聞くだけでした。いつも噂に聞いていた豪快な飲みっぷりの場面に居合わせることが出来なかったのは、後悔するところです。

神戸大学在学中に私が野口教授の研究を充分理解し、真価を認識していたとは言い難く、機会をのがしてしまったことはとても残念に思っています。先生の本を読んで、いかに先生の考えが視野が広く、しかも独自のものであったかを理解したのは、卒業してからのことでした。先生の江戸時代の文学についての講義を聞いた時、先生に英語の本は読まれるかどうか質問したことがあるのですが、今考えると冷や汗が出てきます。その時先生は「読めますよ」と謙虚に答えておられましたが、実は先生の数多くの著書の中の一冊に、アメリカ人の評論家ジョン・ネイサンによる三島由紀夫の伝記の和訳があったのでした。

野口教授は私に語り掛けるため、例外的な行動に出て下さった事もありました。夏目漱石についての新著をプレゼントして下さったり、ある時は院生のたまり場となっている散らかった部屋で、椅子に座って二人で話したりしました。この場面を目撃していた他の院生が、何とも珍しいことだと驚いていました。

しかし、私が一番関心のあるテーマについては、やはり自分ひとりで研究することが多かったように思います。そのテーマとは、美術と文学の内なる結び付きであったり、ニーチェの日本文学への影響であったり、ウィリアム・シェークスピアと漱石の関係であったりしましたが、このようなテーマで論文を書くと、先生方は、自身の関心と余りにも掛け離れているため、評価に手間取った

ようでした。

神大で、私がひそかに楽しんでいた「特別扱い」がありましたが、それは、他の男子院生は皆、「くん付け」で呼ばれるのに、私だけ丁寧に「さん付け」で呼ばれる事でした。しかし、白状すると、日本の大学文化と折り合いを付けるには相当の時間がかかりました。ゼミ中に担当教授から叱られることなく居眠りしている学生を見ると、いつも驚いたものです。

ある時、私が神戸で孤立しているのではないかと心配した林原先生が、教授用の迎賓館に連れて行ってくれた事がありました。大阪湾の夜景を眺めながらビールをついでくれて、東京に引っ越したらどうか、とすすめるのです。そうすれば夏目漱石を研究する著名な学者もずっとたくさんいるから、交流したり、意見の交換をしたりできる、と先生は続けました。

でも、私は東京に引っ越すことなど考えた事もなく、実は東京に旅行することさえ考えていませんでした。なぜかと言うと、ハッキリした理由がありまして、私は地震恐怖症で、東京で近いうちに大地震が起こると皆が噂していたからです。一方、神戸は地震は起こった事が無いので、絶対安全だ、と言うわけです。これは 1994 年のことで、阪神大震災の 1 年前ですね。

震災の 3 ヶ月前、私はついにポートアイランドの寮を出て六甲地区の小さなアパート、「文化住宅」を借りることになりました。そこから坂を上がれば、毎日の通学も簡単です。引越しの準備や家具を備えるのは大変でしたが、ついに、ついに日本社会の一員になれるという思いでいっぱいでした。ところが、そこで突然、大地震に見舞われるのです。

幸運にも、華奢な木造 2 階建の建物は全壊せず、半壊で、壁はひび割れだらけ、ドアもひしゃげてしまいました。神戸は壊滅的な打撃を受け、住む所も無く、私は京都の山科へ避難し、そこでしばらくホームステイをすることになりました。それから、何と皮肉なことにポートアイランドの寮に戻ってもう一年暮らし、最終的には甲子園口の家に落ち着いたのです。

奇妙な事ではありますが、大震災とその直後の数年を神戸で過ごしたことによって、全てが変わりました。失礼ながら、以前は神戸はちょっと退屈な街だと思っていたのですが、今、震災から復興しようと頑張るこの街は、何と活気にあふれていることでしょう。同時に、私は神戸と神戸大学にぐっと親しみを覚えるようになったのです。我々は皆、この大災害を経験した、この日々は 2 度と忘れることはない、という連帯感が生まれました。

地震は 1 月に起こりましたが、当初は神大もしばらく機能停止になったかのようでした。神戸では数千人が犠牲者となり、何十万もの人々が避難生活を余儀なくされました。建物が至る所で崩れ、土ぼこりの悪臭が漂っていました。阪神間の電車が不通だった時期さえありました。しかし間もなく神大は『電撃的精神』と言うしかないような勢いを発揮して、とにもかくにも素早く立ち直り始めたのです。震災の 1 ヶ月後、私は文学部のホールに座って、日本文学の修士課程に入るための試験を受けていました。時は 2 月で、厳しい寒さの中、暖房はありません。受験者全員が、暖を取るためにぶ厚い冬物のコートを着ていたのを覚えています。

しかし、神大と神戸市への愛着はつのるばかりでした。型破りな学生だった私は、ウィークデイには飽きずに本を読んでいましたが、日本語と学問の世界に四六時中ひたっているのに少し疲れたこともあり、他の学生との付き合いはあまりありませんでした。その代わり、週末には大阪心斎橋や難波のゴチャゴチャした界隈のバーに出没する、という二重生活を送るようになったのです。大阪は、最初は関心がなかったけれど、いつの間にか深い愛着を覚えるようになった、という意味で、神戸に続く街となりました。

結果として、博士論文は大阪の上本町のネットカフェで書くことになりましたが、そこはホステスや観光客、サラリーマンとバーで働く人々が行き交う場所でした。神大には 6 年半在籍しましたが、最後の方はほとんど学校には行かず、多分週に一回くらいだったと思います。ここで学んでいた間に、私は日本中、世界中を旅して周りました。それでも、なぜかはわかりませんが、私はこの場所をとてもとても愛しているのです。

2000 年の卒業以来初めて神大に帰ってきたのは、2 年前のホームカミングデーでしたが、その時、キャンパスの上の方にあるホールで朝の式典が行われました。今まで一度も入った事がないホールの壁には、山麓で英雄たちが集っている様子を描いた大きな壁画があって、大変興味を引かれました。正確には何の題材なのかわかりませんが、私が連想したのは中国の古典文学「水滸伝」でした。腐敗した政府に対する反乱軍が王国の国境近くに集結するのです。腐敗しきった中央から距離を置いた時、人々は世界を新たな明確さを持って眺める事が出来ます。

それを見た瞬間から、なぜ神戸大学がユニークで貴重な存在なのか、という理由がだんだんハッキリしてきたように思います。一般的に、神大はいわゆる日本の「良い大学」のひとつだと思われているようです。しかし、声を大にして言いたいのですが、それは間違っています。我々は明らかに他とは違うのです。神大の最も重要な特色は、その素晴らしい立地条件です。高い丘の上に位置し、神戸と大阪の遥かなる都市を一望し、目前には大阪湾がゆったりとひるがえる。我々は世界から隔絶しており、他の誰にも持ち得ない視点を持つ事が出来るのです。

思考の独立性と独自性は、私の人生を支えて来た大きな資質だと思っていますが、それはここ、神戸大学で深く培われたものです。卒業以来、例えば夏目漱石や三島由紀夫などについての著作を出版して来ましたが、そのどれにおいても私が目指したのは、他の誰とも違う、独自の解釈を示す事でした。他の誰か、というのは特に東京の人々、と言っても良いかも知れません。私は近頃の流行やらこだわりやらを追いかける気はさらさら無く、今まで誰も見たことのない視点で物事を見ることを目指しています。現在、毎日新聞で「日本文化をハザマで考える」というコラムを連載していますが、これは日本文化を予期せぬ新鮮な視点から眺めようと試みるものです。

でも、ただ単に学問の中だけで考えているようでは、いくら型破りで、独自の観点があったとしても不十分です。私の生き方そのものも、かくありたいと思うのです。知識人は研究のために大学内に閉じ込もっているべきだ、という考えには反対です。神大を離れて以降、本や論文を出版したり発表したりするだ

けでなく、イギリスで会社を経営しながら、ビジネスや不動産についても、文学と同じくらいの量の文章を書き続けています。また、政治活動もしていますが、それは、完全な人間とは、独立して収入を得るだけでなく、行動するものだと考えるからです。誰も教えてはくれませんが、私が人生において発見した重要な真実とは、人間の行動の全て、文学も、ビジネスも、政治も、全て深いところでつながっている、ということです。ただ狭い視野を打ち破って、遥かに広がる人生が目の前にひるがえっているのを見れば良いのです。

今となっては、京大で勉強しなかったのは私にとっては良かったのかも知れません。もしそれが実現していたら、過去の重みに押しつぶされていたかも知れません。または東京だったら、他人と似たような意見を巡って、少しでも目立とうという競争に巻き込まれていたかも知れません。地方に居たとしたら、《コスモポリタニズム、世界主義》という考えも、神戸と神大が常に共有する「より広い世界への入り口」という洗練された立ち位置も、知ることがなかったでしょう。

他人と違うように考えたり、大胆で根本的に新しいアイデアを示すということは、評論家として一番大切な資質だと思っています。自分の考えが何らかの意味で自分の国を代表するものだ、と思い込むワナに陥らないことも非常に大切です。私は今、皆さんの前にイギリス人として立っているわけではありませんし、だいたい典型的なイギリス人からはほど遠い人間です。むしろ、私は独立したひとりの個人としてここに立っていて、極めて個人的な、予想不可能なやり方で日本文化と関わっています。そして、その日本という国は、注目する対象によっては、画一的とはほど遠く、根本的に多様性を備え持っている国なのです。

私からしますと、この独特で異端児的な神大の特徴は、もっと認識され、宣伝されるべきだと思っています。

実は 2 年前、法学部の式典に参加した後、文学部に立ち寄った時にちょっとしたショックを受けました。1993 年に私が入学した頃にあった古い校舎は建て替えられて、同じ場所にずっと快適そうな真新しい校舎が建っていたからです。

昔に比べ、学生も先生方もずっと贅沢な施設が使えるのだな、と思いました。私が 1990 年代に居た頃に教えていた先生方は誰もおらず、キャンパス内も全く変わってしまっていたので、昔は何があったか思い出すのにひと苦労しました。

これは、私が神大に来る前に 4 年間学部生として通っていたイギリスのケンブリッジ大学と比べると、興味深い経験でした。元々16 世紀に創設された、私が住んでいたカレッジは、私が卒業した 1992 年当時と現在で校舎はほとんど変わっておらず、実際、私の在学当時の先生で、いまだに教えている先生もいます(もしかしてあの人達は 500 年間教え続けてるのかも知れませんが)。その教室に立って目を閉じて、また目を開けたとしたら、もしかして自分は 1992 年当時の、22 歳の時の服を着ているのではないか、という錯覚を覚えるような気がする程です。

ケンブリッジ在学中、あまり幸せでなかった時期もありましたが、卒業後、2 年に 1 度以上のペースでキャンパスを訪れ、夕食会やイベントに出席し、25 年以上に渡ってたくさんの楽しい思い出を作って来ました。でも、卒業後、初めてケンブリッジを訪れた際には、大学図書館に入るのに、現役学生でもないのに入って良いものかとおどおどしてしまったのを覚えています。

そんな私を見て、係官がひとこと、「ケンブリッジ卒業生は、永遠にケンブリッジの一員なのです」と、まるで宣言するように言ってくれたのです。
この言葉によって私は、ケンブリッジ大学と生涯続く絆で結ばれたように感じています。神戸大学にもこのような絆があれば良いな、と思います。

ケンブリッジ時代とは対照的に、神大時代は私にとっては人生で最も幸せで、刺激的な時期のひとつでした。それなのに、今日の訪問は卒業以来わずか 2 回目なのです。今回このようにホームカミングデーを設けて頂き、生涯続く神大との絆をより強く実感することができ、とても嬉しく思います。更に力強い同窓生同士の結び付きと、世界中で神戸大学の存在感が増すことを強く願っています。

もし、ケンブリッジの、私が卒業したカレッジの歴史や、同窓の著名人は誰かと問われれば、かなり長い間お話し出来ると思いますし、大学全体となれば言うに及ばず、アイザック・ニュートンやチャールズ・ダーウィンについて何時間も話すことになるでしょう。ところが、白状すると私は神大の歴史も知りませんし、同窓の著名人もたくさんいるはずなのに、あまりわかりません。学校の歩みや卒業生の活躍など、大学の遺産をより良く認識させるような努力は必要でしょうし、ここに来る誰もが自分の学校のユニークな特長を知るようにすべきでしょう。

巷でよく見かける「世界の大学ランキング」なるものには、馬鹿げたことに神大が 395 位くらいでケンブリッジが 1 位、などと書いてあります。しかし、私にとってはどちらの大学も同じ、愛する我が母校です。

留学生の皆さんは、神戸大学で勉強するに当たって、ただ単に日本文化を経験する、と思ってはいけないと思います。それだったら日本のどこでも経験出来ます。神戸大学は比べようも無く貴重なものを用意してくれているのです。それは、創造的に、そして独立して考えるための空間、優れた頭脳と知的な刺激に囲まれた空間の存在です。

神戸大学ほど自由に呼吸が出来、完璧にして堂々とした眺めを持った場所は、日本中どこにもありません。例えその後の人生をどこで送ることになったとしても、神大で学んだ世界への創造的な関わり方は、一生の財産となるでしょう。

私がなぜこの素晴らしい大学の同窓生であることを誇りに思うのか、お分り頂けましたでしょうか。そして、皆さんに声を高くして申し上げたいのです。『我が同窓の友よ、水滸伝の知的反逆者達、ここ、六甲山で謀反の旗を高く掲げている友よ、あなた方が、唯一無二の、誇るべき、明晰にして柔軟な頭脳を持った精鋭集団の一員であることを、どうか忘れないでいて下さい。』

ご静聴ありがとうございました。